

国語Ⅰ・国語Ⅱ

(解答番号)

1

〜

35

《注意》

「国語Ⅰ」の試験問題は、

3ページ〜38ページです。

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

カメラのレンズは人間の眼めによって覗のぞかれ、自由に操作されるかぎり、両者は同等に機能し、人間の眼のかわりをカメラのレンズが果たしていると思われがちだが、事実はきびしく相反する関係にあったらう。人間の眼の機能を、見るといふ言葉で表現するのであれば、カメラのレンズのメカニツクな機能は、見ることの死であると言わざるをえないほど、両者のあいだには測り知れない隔たり、深い断絶があつたのである。

われわれの眼がものを見ているとき、すでにそこにある現実、さまざまな事物や出来事を個別的に見ているのではなく、それらが連続する総体としての世界を見ているのである。従つて人間の視線は一瞬たりとも運動を停止し、非連続の状態にとどまることはできない。一点に眼をこらし、見つめているようではあつても、それは次の瞬間に新たな運動を起こすための一時的な、かりそめの休止符にすぎない。

たしかに一枚の絵の前にたたずみ、じつと見入っていることがある。だがそのとき、われわれの眼は果たしてなにを見ているというのだろうか。おそらくなにかを見ているという意識はなく、絵の空間ゆみの拡がり、(注1)タブローの表面にただ視線を滑らせ、行きつもどりつしながら反復を繰り返しているのである。それが絵に見入っているときの言いようのない浮遊感であり、気づかぬうちに作品に魅せられていることの神秘さであるのだが、絵に心を奪われていることが意識された瞬間、そうした忘我的な(ア)トウスイはかき消え、単なる事物としてタブローがそこにあるだけである。

このように人間の生きた眼差まなざしはこの世界の表面を軽やかに滑り、たえず運動をつづけており、なにかに見入ることによる視線の停止、非連続はあるかなきかの一瞬にすぎず、それが意識された瞬間には視線はすでに新たな運動を始めているのである。言葉をかえれば、われわれがなにかを見ていると意識するのは、わずかに限られた時間でしかなく、なにも意識せずにもものを見ている、そうした無用、無償の眼差し、おびただしい剰余の眼の動きに支えられて、われわれはこの現実とのたえざる連続を保ちながらこの世界のなかに生きつつあるのである。

それとはまさしく相反して、^A カメラのレンズをとおしてこの現実、この世界を見ることは、こうした人間の眼の無用な動きを否定し、おびただしい剰余の眼がひとつの視点に注がれ、集中するように抑圧することであった。

限りなく拡がる世界の空間から特定されたひとつの被写体を選び、画面に切り取り、それ以外の空間は存在しないかのように排除し、無視することを求める映画の映像は、人間の生きた眼が無意識のうちに呼吸するリズム、その無用な遊びを禁じるようなものであっただろう。しかも映画はそれに見入っているわれわれの時間といったものにまで介入し、きびしく制限を加えることによって、見ることの死を宣言するに等しかったのである。

同じカメラによる表現でありながら、一枚の写真と映画とを対比するならば、動く映像としての映画のありよう、その(イ)ボウギャクぶりがより鮮明になるに違いない。現実にもそこにあるものを映し出すかぎり、映画の映像と写真はともに複製の表現であり、現実をイメージによって捉え、抽象化する絵画とは異なると思われがちだが、それを見るという行為の側に立つならば、

B 写真と絵画はまったく同質のものであっただろう。一枚の写真もまた絵のタブローと同じように見ているのであり、おびただしい剰余の眼差しに支えられて、いまわれわれはまぎれもなくその写真、その絵を見ていることに気づくのである。

だが映画はそうした眼差しの無用さ、無償性を許そうとはせず、あくまで特定の視点を強要し、さらにわれわれがそれに見入っている時間に至るまできびしく制限しようとする、独占的なメディアと言うべきではなかっただろうか。

かつて映画は時間の芸術という美しい名前と呼ばれた時代があった。しかもそれは時間とスピードに魅せられ、^(ウ)ゲンワクされた二十世紀を象徴する言葉でもあっただろう。映画はそのフィルムのひとつ齣、ひとつ齣が、一秒間に二十四齣という眼にはとまらぬ速度で動くことによつて、網膜に残像がしるしづけられ、われわれはそれを連続する映像として見るのである。そのかぎりでは映像のひとつ齣、ひとつ齣に加えられた速度、時間を停止してしまえば、映し出されているものは一枚の写真とかわらず、絵のタブローと同様にわれわれの眼が自由にそれを見ることができはらずである。

従つて **C** 映画が映画であるのは、この速度を産み出す時間に依存しているものであり、それはフィルムのひとつ齣、ひとつ齣の動きのみならず、一時間、あるいは二時間と連続して映写される時間の流れを誰も疑わず、停止しようとはしなかったからで

あった。そして息つく間もないスピードの表現であることが、わずか二時間たらずのあいだに人間の一生を描くことができた理由であり、神による天地創造の神話から一億光年の彼方^{かなた}の宇宙の物語まで映画は語りえたのである。

しかしながら映画を見るといふ行為は、一瞬たりとも休むことのない時間の速度にとらわれ、その奴隷と化することでもあった。静止して動くことのない絵画や写真の場合は、さまざまな視点から自由に眺めながら、みずからの内面でゆっくりと対話することもできるだろう。だが映画は一方通行的に早い速度で流れる時間に圧倒されて、ついにはひとつの意味しか見出せない危険な表現であり、二十世紀の国家権力やコマーシャルイズムが濫用し、悪用したのも、こうした映画における見ることの死であったのである。

それにして(注2)も小津さんは新たなメディアとしての映画が持ちあわせた特権、その魅力をことごとく否定する、まさしく反映画の人であったと言うほかはない。カメラのレンズをとおして現実を切り取り、それを映像化することが世界の秩序を乱すと懸念する小津さんであれば、われわれの無用な、無償の眼差しを許そうとしない映画の独占的な支配を受け入れるはずもなかった。ましてや反復とずれによって気づかぬうちに移ろいゆくのが小津さんが感じる時間とその流れであり、二時間たらずの映画の上映で人間の一生が語りつくされたり、一億光年の宇宙の果てまで旅するような時間の超スピードぶりは、われわれの眼を(エ)アザムくまやかしてしかなかった。

だが小津さんは映画表現のありようにまさしく反抗しながら、それにもかかわらず限りなく映画を愛するという矛盾をみごとに生きぬいた人でもあった。そのためには映画のまやかしと戯れつづけ、共棲きせいしあうといった、あの小津さんらしい諧謔かいぎやくぶりがおのずから求められたのである。

トッキー映画である(注3)『一人息子』にしても、科白せりふや音響効果によって映画がいつそう表現力を高め、迫真性が加わることを嫌い、あえて意味が曖昧あいまいのままに浮遊する映像を、トッキー映画への戯れとして小津さんは試みたに違いない。事実、場末のゴミ処理場を望む野原に座って語りあう母親と息子のシーンは、たしかに科白は聴こえながら、対話しあっているとは思えないように(注5)モニタージュされておき、その視線もまたたがいに宙に漂い、すれ違ふようにしてあてもなく拡散してゆく。従って母親と息

子とが親しく語りあうことがドラマでありながら、画面に映し出されている俳優の姿かたち、人間としての存在のありようのほういやわが否応なく、よりくつきりと浮き彫りにされ、映画の筋立てとはかかわりなく、われわれの無用の眼差しによってそれは見られてしまうのである。

おそらく小津さんがひそかに心に描いていたのは、**D**「見せる」ことよりも、われわれの無用、無償の眼差しによって「見られる」映像を試みることにあったのではないだろうか。映画にたずさわる人間であれば誰しもが、その表現の一方通行的である優位さを過信して、観客に映像を「見せる」ことに「**フ**」シンするのだろうが、小津さんにかぎっては「見せる」ことよりも、観客によつて「見られる」、あるいは「見返される」映像を実現するために心を砕いたのである。

(吉田喜重『小津安二郎の反映画』による)

(注) 1 タブロー——カンバスや板に描かれた絵画作品。

2 小津さん——映画監督・小津安二郎おつやせいろ(一九〇三〜六三)のこと。この文章の執筆者である吉田喜重よしだよししげ自身も映画監督であり、小津安二郎の映画に制作スタッフとしてかかわったことがある。

3 トーキ—映画——映像と同時に音声が出る方式の映画。サイレント(無声)映画と対比して言う。

4 『二人息子』——一九三六年に封切りされた小津安二郎の最初のトーキー作品。

5 モンタージュ——映像・写真の構成方法の一つ。ここでは、映画において、撮影したフィルムを配列し、作品に組み立てる操作のこと。

問 1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
く
5

(ア) トウスイ

- ① 飛行機のトウジョウ券
 ② 議論がフットウする
 ③ トウベンを求められる
 ④ 亡き人をアイトウする
 ⑤ 恩師からクントウを受ける

(イ) ボウギヤク

- ① 株価がボウラクする
 ② ムボウな登山を試みる
 ③ 安眠をボウガイされる
 ④ ボウセンに努める
 ⑤ 酸素がケツボウする

(ウ) ゲンワク

- ① ゴミのゲンリョウに努める
 ② ジョウゲンの月を眺める
 ③ ヘンゲン自在に出没する
 ④ 能のユウゲンな世界に接する
 ⑤ ゲンセイに処分する

(エ) アザムク

- ① キョギの申告を罰する
 ② ギタイ語を多用する
 ③ ギシン暗鬼の念
 ④ 悪質なサギ行為
 ⑤ ギブンに駆られる

(オ) フシン

- ① フオンな空気が漂う
 ② 新たなフニン地に慣れる
 ③ 家族をフヨウする
 ④ 組織のフハイが進む
 ⑤ キユウフ金が増額される

問 2 傍線部 A「カメラのレンズをとおしてこの現実、この世界を見ること」とあるが、「カメラのレンズ」の機能の説明として最

も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

6

- ① カメラのレンズは、現実のさまざまな事物や出来事を、個別的にではなく連続的に写し取る。
- ② カメラのレンズは、現実のなかから被写体を選び出し、そのありのままの姿を正確に写し取る。
- ③ カメラのレンズは、無限の現実から特定の対象を切り取ることにより、現実の世界を否定する。
- ④ カメラのレンズは、連続する世界のなかから特定の部分を写し取り、それ以外の部分を排除する。
- ⑤ カメラのレンズは、人間の手で自由に操作されるかぎりにおいて、人間の眼と同等の能力を持つ。

問3 傍線部B「写真と絵画はまったく同質のものであったらう」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当

なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 動く映像としての映画のあり方と対比すれば明らかであるが、写真と絵画は現実の流れに流れている時間を静止させて複製しているという点で、見る者からすれば同じ性質であるということ。
- ② 写真に写された世界はカメラによつて切り取られ限定されているが、絵画も画家の眼により世界の一部分が切り取られて画面に再現されている点で、同様に限定的なものであるということ。
- ③ 絵画を見るとき私たちの眼は一点を見つめているようであっても常に動きつづけているが、写真を見るとき私たちの視線もその上を浮遊し、自由に運動しつづけるものだということ。
- ④ レンズでとらえた写真と画家の肉眼がとらえた絵画とは異質な点もあるが、どちらも奥行きのない平面における表現であり、私たちの視線はそれらの表面を漂うしかないということ。
- ⑤ 画家によつて描かれる絵画と機械によつて撮影される写真とは異質なものと思われがちだが、現実をなんらかの媒介物に転写したものであるという点で、両者は同様であるということ。

問 4 傍線部 C「映画が映画であるのは、この速度を産み出す時間に依存している」とあるが、筆者は「映画」が「時間に依存している」ことでどのような結果が生じたと考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 映画は、人間の一生をわずか二時間たらずで映し出すことを可能にしたが、観客をひきつける動く映像の迫真性によつて、国家権力やコマーシャルイズムに利用されてしまうという結果になった。
- ② 映画は、一秒間に二十四齣というフィルムの映写速度で観客の眼差しを支配し、神話などの虚構まで表現することを可能にしたが、そうした錯覚によるまやかしは見ることの死をもたらした。
- ③ 映画は、限られた時間のなかで壮大な時空間を描き出すようなことを可能にしたが、映画に見入っている時間をきびしく制限しようとするので、観客の眼差しを抑圧してしまうことになった。
- ④ 映画は、息つく間もないスピード感到に満ちた物語や広大な宇宙の物語を表現することを可能にしたが、ゆるやかに移ろいゆく時間を、反復とずれによつて表現することが不可能になった。
- ⑤ 映画は、画像が連続する新しい芸術として発展したが、ひとたびその速度に慣らされてしまった観客には、絵画や写真のように静止した画像と内面でゆっくりと対話することが困難になった。

問5 傍線部D『見せる』ことよりも、われわれの無用、無償の眼差しによって『見られる』映像を試みることにあった」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① スピード感を持たせた編集によって観客に一方通行的に映像を見せるのではなく、ゆるやかなテンポを持たせた編集によって、観客が余裕を持って画面の細部まで見ることができるよう映像を試みることに。
- ② 時間の流れに従属させることで観客の視線を限定するような映像を見せるのではなく、観客それぞれの自由な見方に任せることによって、単一の意味で受けとられてしまわないような映像を試みることに。
- ③ 特定の視点から撮影することでそれ以外の空間が存在しないかのような映像を見せるのではなく、人間の眼がさまざまな空間を自由に見ることができると同様に、多様な角度からの映像を試みることに。
- ④ 作り手の表現意図の伝達を目的としてすべての観客が同じ意味に到達するような映像を見せるのではなく、さまざまな意味合いを含んだ複雑な内容によって、個々の観客が自由に解釈できる映像を試みることに。
- ⑤ フィルムのひと齧りと齧りを連続して映写することで観客の視線をくぎ付けにする映像を見せるのではなく、画面に映し出されていない場所やその舞台裏についても、観客が想像力を発揮できる映像を試みることに。

問 6 本文の内容に最もよく合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① ひとつの意味を強調するという性質ゆえ、映画は国家権力やコマーシャルイズムに悪用されるに至ったが、そのような事態に対して、小津安二郎の映画は、戯れや諧謔に満ちた自由な筋立てによって抵抗している。
- ② 長大な時間の中で起こるできごとを二時間程度で表現できる点で、映画は日常的な時間の制約から自由な芸術であるが、小津安二郎の映画は、そのような自由を否定し、現実の時間の流れに従うように作られている。
- ③ 絵画や写真を鑑賞する場合と比べれば明らかのように、映画は観客の眼の運動を制限してただひとつの筋立てに従わせようとするが、小津安二郎の映画は、そのような制限を取り払い、筋立てが複数化されている。
- ④ カメラのレンズと比べて自由であるはずの眼の運動を制限することによって、映画は観客に特定の視点を強制するが、小津安二郎の映画は、そのような強制をまぬがれた見方を観客ができるように作られている。
- ⑤ 一方通行的に速い速度で流れる時間を強いることで、映画は観客を独占的に支配するという一般的性質を持っているが、小津安二郎の映画は、そのような特質を徹底することで、かえって映画の限界を突破している。

第2問

次の文章は、遠藤周作の小説『肉親再会』の一節で、主人公の「私」が七年ぶりに妹に会いにパリを訪れた場面である。これを読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

あついシヨコラ(注1)を飲みほすと私は路をおりて、中世美術館の鉄柵(てつさく)の前に出る。椽(とちのき)や椽(にれ)の金色の落葉が芝生にちらばって、子供たちが小鳥に餌をやっている。今どきの時刻には館内にほとんど人影のないことは昔の経験で知っている。

色硝子(ガラス)をはめこんだ窓から晩秋の微光が洩れて、館内には二、三人の番人が隅に腰をかけているほか、誰も訪れてはいない。

私はリルケが「マルテの手記」(注2)で描写したゴブラン織りの一角獣を眺める。それから十二、三世紀に作られた幾つものふるい聖人像の前にたちどまり、私は、漸く私が喪った大切なものの一つの前に進むのだ。A 私が喪った大切なものの一つ。誰が作った

のかわからぬ木彫の基督(キリスト)の死顔。脂汗と苦しみとが滲(にじ)んでいる残酷な額。頬骨(ほおほね)が突き出て鼻の肉もそげている。唇は残った気力まで消耗しつくしている。いくら書いても書きたりないが、ただこの丸い木の塊からなにか眼を射るような光が発しているのだ。

七年前、幾度もここに足を運んでこの木彫のように眼を射る光の発するものを自分も創(つく)りたいと思った。だが日本に戻り家庭を持つと、生活のためにこの光への執着を少しずつ失ってしまったような気がする。その代償として今、身につけている真新しいトウイド(注3)のコートまで作れるような余裕ある金を得ることができたのである。私はあの時、自分の片半分の囁(ささや)きに耳を塞(ふさ)いで、もう一つの「安易な声を聞いたことを心の隅でいつも恥ずかしく思っている。

空は曇っていたが、それと同じように少し憂鬱(ゆううつ)な気持ちで私は美術館を出た。煙草屋(たばこ)でつよい匂(にお)いのする煙草の箱を買い、それをふかしながら今度は少し当てもなく河岸にそって歩きはじめた。

岸の石の手すりに手をかけていると妹の部屋を尋ねてみようかという気がふと胸のなかに起こった。昨夜もそうだったが今朝も彼女は私が彼女の下宿をたずねるのをなぜか避けているような気がした。あいつにはひよつとすると男がいるのかもしれないという怪しい疑惑が私の頭をかすめた。二十数歳にもなる女なのだから恋人の一人ぐらい存在しても不思議ではないのに、いざ自

分の妹のこととなるとこの想像は理由もなく不愉快だった。彼女が昨夜、タクシーのなかで煙草を喫っているのを見た時と同じような嫌な感じがこみあげてきたのである。

地下鉄を一つ乗りかえて私はコンコルドまで引きかえした。妹が住んでいる家はM……という仏蘭西人の家で、日本に送ってくる彼女の手紙にはいつもこの家庭が親身も及ばぬほど親切であることを書きつらねていた。そして彼女の部屋の窓からは河や革命広場を見ることができるとのべてあった。

パリで家を探すのはそんなに難しくはない。道をはさんで奇数番号の家が片側に偶数番号の家がもう一方の側に並んでいるからだ。私はM氏にあかるい家の前にたつて、すこしためらつたが、思いきつて呼び鈴を押すと、門番らしい老婆がなにかを食べながら出てきた。

老婆は妹の名を告げた私に、口を動かしながらよごれた手で建物の裏を指さした。はじめはその意味がよく呑みこめず聞きかえずと彼女は日本人の娘は裏の入口から入った六階に住んでいるのだと答えた。

建物の裏口にまわると下水がこわれているのか地面が濡れている。その濡れた地面には玉葱や馬鈴薯の皮が穢らしくちらばっていた。裏口は洞穴のように暗く、安ものの脂の臭いがこもっていて、私がそこから狭い階段を登ろうとすると、黒人の男が出て来て、昇降台を利用しろと教えてくれた。

昇降台は人に乗せるためというよりは階上に荷物を運んだり、階下に塵芥をおろすためのものらしい。油のきれたロープが軋んだ音をたてるのを耳にしながら私はゆつくりと六階に運ばれた。

六階の廊下につくと子供の大きな泣き声がかこえた。審のような部屋が幾つか並んでいて、部屋のかげから大きな体をもつた黒人の女が顔をだした。子供の泣き声はここからひびいてくる。沢山の着が壁の両端にむすんだ綱に干してある。

私は一つの扉の前にたつて、ぼんやりとそこに貼りつけてある妹の名札を眺めていた。黒人の女が出てきて、私の言葉を聞く合鍵を持ってきてくれた。

妹の部屋は暗く、寒く、小さかった。これはパリでもっとも貧しい人々が住む屋根裏部屋にちがいがなかった。二スの剥げた古

い洋服ダンスが一つ、鉄製のベッドが一つ。小さな窓の硝子に罅がはいって、そこに妹が日本の千代紙を丸くきって貼っているのがあわれた。私はしばらく固いベッドの上に腰をかけてペンキこそ塗つてあるが天井を走る幾つもの鉄管をじつと見あげて、

B (要するに……こんなものだったんだな)

と呟いた。洋服ダンスに手をかけると軋んだ音をたてて扉があいた。掛けてある洋服はどれも見おぼえがある。みな五年前に日本にいた頃、作つた古いものばかりだ。内側の棚に二枚の写真をおいてある。一枚は彼女自身のもの。そしてもう一枚は私たち夫婦と私の息子の写真である。その写真の上に妹は折り紙の鶴をぶらさげている。

部屋の扉をしめると私は蹠音をしのばせて廊下に出た。黒人の女はまだ両手を腰にあてて監視でもするようにこつちを覗いていた。

六時にモンパルナスのキャフェで彼女を待った。この時刻、キャフェのなかは満員で、異様な髪をした少女や肋骨のような外套を着て、髭をはやした青年たちが店の中を右往左往している。煙草の煙が濛々とたちこめ色々な国の言葉が耳に飛びこんでくる。どれもこれも自分を芸術家だと信じこんでいる連中ばかりなのだ。私は七年前も今も巴里に「たむろする無数のこういう連中を軽蔑し、屑だと考えている。もちろんその中には真剣な奴もいる。しかし真剣だからといってこの残酷な世界だけはどうにもなるものではない。だれもがあの中世美術館の基督の死顔のような光のつらぬくものを創れはしない。巴里ではその連中は年をとり、くたびれ、老いた獣のように敗残者となる。

(じゃ、お前はどうか) 私はマルティーニ酒を口にふくみながら自分自身にたずねた。唇から琥珀色の酒が私の着ているトゥードのコートに少しこぼれた。私は妹の部屋にぶらさがっていた古い洋服を思い出す。(お前は敗残者にならないために日本に戻っただけじゃないか。安易な仕事ばかりしてこのコートをかう金をかせぐだけじゃないか)

人いきれで曇つたキャフェの硝子戸をそつと押す妹の体がみえた。昨夜と同じように水玉のスカーフを首に巻いてレインコート

トを着ている。彼女になにを飲むかときくと、サンザノ酒がいいわと答えた。お前、顔色がわるいなと私は言った。

「元氣なんだけどな。今日、タイプを沢山うちすぎたから疲れたのかもしれないわ」

妹は日本にいる時からタイプは素晴らしく早く打てた。昨夜はあまり気にもとめなかった彼女の服装を、私は注意ぶかく観察する。女学生のような恰好かっこうをした彼女がきちんと横むきにそろえた細長い脚はどこか冷たそうだった。明日この子の自尊心を傷つけぬ口実をつけて襟巻でも買ってやりたいと思った。

「一日、あたしがいなくても面白かった？」

「ああ、あちこち歩きまわったり地下鉄に乗ったり、すっかり赤毛布(注7) あかゲットだな」私はそこで口を噤んだがどうせ、わかることだったから、

「君の下宿によったよ」

妹は黙っていた。

「俺おれさ、考えたんだけど、君、日本に帰る気はないか」

「なぜ」

「なぜって、まあ随分ながくこちらに居たじゃないか。もう充分だろう」

「まだ、やりたいことをやりかけだわ。先生だつてこれからだと言つてくださるんだもの」

「誰だ、その先生つてのは」

「レーベジエフさんよ。昨日、話したじゃない」妹は今度は怒つたように言った。「マリニイ座で先月も出た一流の俳優よ。日本人で彼に教えて頂いているのは私一人よ」

C 私は思わず、自分たちの周囲をもう一度みまわした。相変わらず異様な髪かみの形をした女や、肋骨のような外套を着た男たちが幾十人もキャフェのなかを右往左往していた。これらは屑だ。どれもこれも巴里のなかで自分だけは才能があると思ひ、沈んでいく連中だ。妹も今、この異国の都会でその一人になろうとしている。

「でも、こんな連中みたいになつたらお終しまいじゃないか」

私は自分のトウイードのコートに眼を落とした。だが妹は負けずに、

「たとえば、そうなつたつて……生きるこゝつて結果ではないじゃないの、^(ウ)償なわれなくつたつて自分がいいならそれで結構じゃないの」

「だがな、この連中を見ろよ。惨めだと思わないかい」

この街にまで来て妹と争あいたくはない。ただ、これら男女が、しゃべつたり、懸命になつたり誠実に生きても、芸術の残酷な世界では立派なものを生むとは限らないと妹に言つてやりたかつたのである。だが言葉はうまく口からは出でずにそれは別の結果を彼女に及およぼしたらしい。

「わかつたわ」妹はまばたきもせず黒い大きな眼で私をみつめて、「だからポーちゃん(注8)は日本に帰つたんでしよう。ポーちゃん
はなにか報はわれなければ嫌きらだつたんでしよう」

「よそごよ。喧嘩けんかするのは」

私は勘定書を手にとつた。D 妹の言つてゐることは半分は正しい。七年前、私の片半分は安易さを捨てろ、もつともつこの街に一人で止とどまるべきだと囁ささいていた。それに耳を塞ふいだ私はあの中世美術館の基督の死顔を喪ない、そのかわりこのトウイードのコートをえた。

(注)

- 1 ショコラ——チョコレート飲料。
- 2 「マルテの手記」——オーストリアの文学者リルケの小説。
- 3 トウイード——毛織物の一種。
- 4 コンコルド——パリの広場の名。
- 5 モンパルナス——パリの一地区の名。
- 6 キャフェ——カフェのこと。
- 7 赤毛布——不慣れた旅行者のこと。
- 8 ポーちゃん——妹が「私」に付けた愛称。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の表現の本文中における意味内容として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

11

～

13

(ア) 安易な声を聞いた

11

- ① 神経をすり減らす厳しい作業に嫌気がさした
- ② 芸術家を気取りたいという一時の誘惑に負けた
- ③ 気楽な仕事への言葉巧みな勧誘に従った
- ④ 困難を避けて生活者としての道をとった
- ⑤ その時々都合のよい解釈で自分を力づけた

(イ) たむろする

12

- ① 芸術家になった気分浸っている
- ② 自分の夢を求め群れ集まっている
- ③ チャンスを求めてうろついている
- ④ 身勝手な芸術論を言い合っている
- ⑤ 雑談にふけてすわり込んでいる

(ウ) 償われなくたって

13

- ① 努力に見合う満足感が得られなくても
- ② 支出に見合う収入が得られなくても
- ③ 犠牲に見合う感謝が得られなくても
- ④ 意気込みに見合う答えが得られなくても
- ⑤ 苦勞に見合う成果が得られなくても

問 2 傍線部 A「私が喪った大切なものの一つ。誰が作ったのかわからない木彫の基督の死顔」とあるが、「木彫の基督の死顔」を「喪った」とは、ここではどのようなことを意味しているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 真の芸術を創作することで人々の困窮を救おうとする心を喪ったこと。
- ② 古典的な作品を否定し新しい芸術を開拓しようとする心を喪ったこと。
- ③ 「私」の中に光がひそんでいるという信念を持ち続ける心を喪ったこと。
- ④ 人の魂を激しく揺さぶるような芸術の創造を希求する心を喪ったこと。
- ⑤ 光を放つ芸術を創り社会的榮譽を手に入れようとする心を喪ったこと。

問 3

傍線部 B 「要するに……こんなものだったんだな」とあるが、ここから「私」の妹に対するどのような心情が読みとれるか。その説明として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 手紙の内容から妹が満ち足りた暮らしをしていると想像していたわけではないが、実態を目の当たりにして、夢の実現を目指して貧しい生活をしている彼女を痛ましく思っている。
- ② 妹が家族にまで虚勢を張っていたと知って不愉快になる一方で、貧しい生活ぶりが現れている部屋を実際に見て、自分が断念した生き方を実践している彼女をねたましくも思っている。
- ③ 手紙の内容から妹の生活に関して安心感を抱いていたのだが、実際に貧しい生活をしている彼女の様子を見て、兄の自分だけにはもつと素直に頼ってほしかったと、残念に思っている。
- ④ 妹の芸術家を気取った部屋と不潔な環境を見て予想したとおりだと思っただが、貧しい生活をするのが芸術家の条件であると彼女が考えていることがわかり、情けなく思っている。
- ⑤ 妹が貧しい生活に耐え暮らしている中で日本や家族に対して強い愛着を抱いていることに改めて気づき、彼女はこんなにも日本に帰りたがっていたのかと、かわいそうに思っている。

問 4

傍線部 C「私は思わず、自分たちの周囲をもう一度みまわした」とあるが、なぜこのような態度を「私」はとったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16

- ① 日本に帰らずパリでやりたいことをやると一人よがりにより自己主張する妹は、カフェに出入りしていくうち次第に自尊心が傷つけられ挫折し、破滅的な行動をしている人々と同じではないかと感じたから。
- ② 突然怒りを露わにした妹の姿は芸術に行き詰まった焦りの結果であり、この苦悩の状態の中で信念を貫き通すことができず、自信に満ちあふれた人々の中で脱落するのではないかと感じたから。
- ③ 先生という権威を借りて自分には才能があることを認めさせようとする妹の姿は、異様な恰好をするなどして、藝術家としての才能があるかのようにふるまう人々と同じではないかと感じたから。
- ④ 先生である外国人俳優は妹を有望な芸術家志望の若者ととらえており、彼に教わることで俳優になれると信じている彼女は、一流という世俗的な芸術観を重視している人間と同じではないかと感じたから。
- ⑤ 自己の才能に自信を失っている妹を怒らせ大声を出させてしまったので、一流の俳優になるには今の環境では不可能だという残酷な真実を伝える前に、少し間をおく必要があるのではないかと感じたから。

問5 傍線部D「妹の言っていることは半分は正しい」とあるが、なぜ「私」は「半分は正しい」と考えているのか。その説明として

最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 妹の発言は、芸術家は生活が安定すると優れた作品を創作できないとする点で未熟な芸術観だと思ったが、パリでの生活苦から逃れるために日本に戻ったというのが本心であることは明らかだから。
- ② 妹の発言は、「私」が世俗的な評価を得なければ満足できない人間だとする点で表面的な見方だと思ったが、芸術の理想を追い求めることをやめて帰国したという事実は認めざるを得ないから。
- ③ 妹の発言は、「私」がパリに未練を残したまましぶしぶ帰国したとする点で勝手な推測だと思ったが、帰国した自分が現在の安定した生活に心から満足しているわけではないのは確かだから。
- ④ 妹の発言は、「私」が誘惑に弱く芸術より生活を優先したとする点で一方的な決め付けだと思ったが、芸術を極めることの困難に負けたことを帰国の理由とする妹の指摘だけは的を射ているから。
- ⑤ 妹の発言は、芸術家は自己満足が究極の目的であるとする点で浅薄な見解だと思ったが、自分の帰国の原因は好き勝手にふるまう芸術家に対する嫌悪感にあると妹が考えているのは納得できるから。

問 6 本文において「私」が考える芸術の世界とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

- ① 自分には素晴らしい資質があると自負している場合にも、情熱がともなわないと創作を続けることは困難であり、芸術のために生活を犠牲にして惜しまない者だけが生き残る世界である。
- ② たとえ人の目を引くような独創的な作品を創る技能と才能にめぐまれていても、伝統につちかわれた技能の習得も必要とされ、過酷な修業の中で個性がすり減らされていく世界である。
- ③ 異様な恰好が自己表現として評価されるような特殊な価値観が必要であり、創作に対する誠実さと忍耐力を發揮したとしても、特異な個性を持っていない限り惨めな敗残者になる世界である。
- ④ 多くの者が自己の才能を信じて優れた芸術の創造を目指すか、彼らの意欲や誠意にはかかわりなく、特別な才能と機会にめぐまれたごく少数の者だけが到達することのできる世界である。
- ⑤ たとえ地位や名誉を求めることなく虚心に創作し、満足できる作品を創り得たとしても、評価を下すのは最終的には他人であり、多くの場合は世に理解されず無惨に捨て去られる世界である。

第3問

次の文章は、『日光山縁起』の一節である。有宇中將は狩獵に熱中するあまり、帝の怒りに触れ、都を出た。東山道下野国二荒山を経て陸奥国へ行き、朝日の君と結婚、幸福な生活を送り、六年がたった。以下の文章は、それに続くものである。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

ある時、中將、昼寝させ給ひける御夢に、いづちともなく荻薄生ひ茂りたる野原の、まことに(ア)心すごき所に、うす絹のすそ、露にうちしほれたる女房ただひとり立ち給へり。いたはしと思ひて立ち寄り見給へば、わが母にておはせり。中將を見たてまつりて、袖もしぼりあへず、仰せけるは、「都に捨ておき給ひしその嘆きに、月日の行くもおぼえはべらねども、はや六年になりぬ。この思ひゆゑ、われこの世になき身となりにき」とて、さもうらめしげなる気色にて、道もそこはかとなき野中を西へ向きて行き給ふ、とおぼして、夢うちさめぬ。さては都へ歸りても見(ア)たてまつらんことあるまじけれども、せめてのなくさみに御跡なりとも、とおぼしめして、朝日の君にのたまひけるは、「わが母、都におはします。かくとも申さであくがれ出でしが、御恋しければ、しばらくの御いとまを」とて、(B)また旅の空におぼしめしたちけり。

朝日の君、「もろともに」と仰せけれども、「このたびは具足し(注1)たてまつるべからず」と仰せければ、「さらば道すがらの供奉の人などを」と申させ給ひければ、中將のたまふやう、「われ都を出でし時も、馬と犬と鷹ばかりなり。今もこれに過ぐべからず」と、仰せあれば、あまりの御思ひに、(注2)縹の帯を結びつつ、たがひに持ち給ひて、「われも人も別るることあらば解けなん」とちぎり給ふ。また申させ給ひけるは、「行く末に川あり。妻離川と申せり。この川の水を飲みぬればふたたび妻にあはずと申すなり。(イ)かまへて飲み給ふな」と仰せけり。やうやう行き給ふほどに、一日行きて大川あり。かの水を御覽するより、飲まんと思ひ給ふこと限りなし。さりながら、人の教へをおぼしめし出でて、渡らせ給ひけるが、命も絶えぬべかりしほどに、力なく飲ませ給ひけり。それより御身いたはりて、川近き野辺に五日ふしなやみ給ひけり。されども息吹き出でさせ給ひけり。さて馬に向かひて仰せけるは、「わが命ながらふべしとおぼえず。いづちへも心しづかならむ所へとくくとく具足せよ」と仰せければ、立ち寄り乗せ(注3)たてまつりて、はじめ一夜とどませ給ひたりし、東山道の山中へ入れまゐらせぬ。それより都の母

上へ御文まゐらせ給ふ。「夢に見たてまつりて、急ぎ都へのほりはへる道にて所勞をうけ、知らぬ山路の露と消えぬ。今生の宿縁うすくとも、来世のちぎりは朽ちずしてまみえ、たてまつらん」と心ほそげにあそばして、鞍くらの前輪に結び付けつつ、「汝なれどとしごろの心ざし思ひ知らば、この文都へもてまゐれ」と仰せければ、馬涙を流して都の方へ急ぎけり。また朝日の君へも御文こまごまとあそばして、かくなむ。

C ちぎりおきし妻離川の水ゆゑに露の命となりけるかな

とあそばして、鷹に向かひてのたまひけるは、「馬は都へ行きぬ。汝この文朝日の君に奉れ」とて、賜たまばせ給ふ。

(ウ) さるほどに、朝日の君の縹の帯解けたりけるほどに、あやしみて、夜にまぎれあくがれ出で給ひつつ、七日と申すに妻離川に着き給ひぬ。いづくともなく、鷹飛び来りて御文を落とす。中将殿の御文なりければ、やがて御返しあり。

D 結びおきし縹の帯をしるべにて別れし君を尋ねてぞ行く

「われよりさきにとくして奉れ」と仰せければ、鷹、急ぎ飛び帰りけり。

都には、中将殿の母上かくれさせ給ひて、七日の御いとなみありけるに、馬、(注3) 大将殿の御坪へ入りて、いばえけり。人々見知りて、「これはひととせ中将殿の召して出でさせ給ひし青鹿毛あそかげなり。中将殿の入らせ給ふか」と申しければ、大将殿も急ぎ出でさせ給ひて御覧すれば、鞍に御文を付けたるばかりなり。急ぎ取りあげ見給へば、最後の御文なり。大将は、北の御方の御別れにこの御嘆きさしそひて、**E** 御心中おしはかるべし。

(注) 1 縹——うすい藍色。

2 東山道の山中——都を出て七日目に一夜とどまつた下野国二荒山の山中。

3 大将殿の御坪——大将の邸宅の内庭。大将は中将の父親。

問 1

傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

19
～
21

(ア) 心すごき所に

19

- ① ぞつとするくらい美しい所に
- ② 我慢ができないほど寒い所に
- ③ 影もわからないほど暗い所に
- ④ 人けがなくものさびしい所に
- ⑤ 考えられないくらい広い所に

(イ) かまへて飲み給ふな

20

- ① いい加減な心がまえでお飲みになってはいけません
- ② 疑いをもったままでお飲みになってはいけません
- ③ おからだにさわるほどお飲みになってはいけません
- ④ なりふりかまわずにお飲みになってはいけません
- ⑤ どんなことがあってもお飲みになってはいけません

(ウ) さるほどに

21

- ① そのまま
- ② やがて
- ③ さて
- ④ まもなく
- ⑤ そのうち

問 2 波線部 a ～ d の敬語について、それぞれの敬意の対象はだれか。その組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ⑤ | a | 中将の母 | b | 朝日の君 | c | 中将の母 | d | 中将 |
| ④ | a | 中将 | b | 朝日の君 | c | 朝日の君 | d | 中将 |
| ③ | a | 中将 | b | 中将 | c | 中将の母 | d | 朝日の君 |
| ② | a | 中将の母 | b | 中将 | c | 中将 | d | 中将の母 |
| ① | a | 中将の母 | b | 朝日の君 | c | 中将 | d | 中将の母 |

問3 傍線部 A「また旅の空におぼしめしたちけり」とあるが、中将はなぜそのように思い立ったのか。その説明として最も適当

なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 23。

- ① 都を離れている間に亡くなった母が、弔い事をしてもらえないことをうらめしげに訴える夢を見た中将は、悲しさが募り、せめて七回忌の法事だけでも出席したいと考えたから。
- ② 別れを告げずに都に残してきた母が、うらめしげな様子で自らの死を伝える夢を見た中将は、恋しさが募り、母の言葉どおりであればせめて弔い事だけでもしたいと考えたから。
- ③ 別れを告げずに都に残してきた母が、出家して西国へ旅立とうとする夢を見た中将は、驚きあわてて、引き留められないまでもせめて後を追わなければならないと考えたから。
- ④ 別れを告げずに都に残してきた母が、さびしさのあまり死んでしまいそうだと訴える夢を見た中将は、気の毒に思い、せめてこれからは親孝行をしなければならぬと考えたから。
- ⑤ 都を離れている間に亡くなった母が、さびしさのあまり死んでしまったことをうらめしげに訴える夢を見た中将は、後悔の念にかられ、せめて出家して菩提ぼだいを弔たづないたいと考えたから。

問 4 傍線部 B」としころの心ざし」とあるが、その内容の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は

24

- ① 都を離れたときから我が身の罪を悔い、いつかは出家を果たしたいと望み続けてきたこと。
- ② 都を出たときから苦しい旅路をともしてきた馬を、大切な仲間として扱い続けてきたこと。
- ③ 来世でもふたたび夫婦の契りを結びたいと思うくらいに、朝日の君を愛し続けてきたこと。
- ④ いつかは陸奥を離れて都にのぼり、ふたたび帝の臣下として仕えたいと願い続けてきたこと。
- ⑤ もう一度母に会って、何も告げずに都を出てしまった不孝をわびたいと思いつけてきたこと。

問 5 傍線部 C ・ D の歌を詠むことにより、中将と朝日の君はそれぞれ何を伝えようとしたのか。その説明として最も適当なもの、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 中将は、約束を忘れてしまったために、危機に直面していることを伝えようとし、朝日の君は、縹の帯が解けてしまったことに不吉な兆しを感じて、別れたあなたの無事をどうしても確かめたいという決意を伝えようとした。
- ② 中将は、約束に忠実に従い、なんとか命をつないでいるうちにどうか助けに来てほしいということを伝えようとし、朝日の君は、固い約束の証である縹の帯を目印にして、すぐにあなたを助けに行くという決意を伝えようとした。
- ③ 中将は、約束を守りきれなかったために、私の命は今にも消えてしまいそうだとすることを伝えようとし、朝日の君は、固い絆きずなの証として結んだ縹の帯を手引きとして、別れたあなたを探し出すのだという決意を伝えようとした。
- ④ 中将は、約束に背いてしまったせいで罰をうけ、殺されてしまうかもしれないということを伝えようとし、朝日の君は、不用意に縹の帯を解いてしまったことに動揺し、必ずあなたを救い出すのだという決意を伝えようとした。
- ⑤ 中将は、約束を思い出したおかげで、辛うじて雨露をしのいで生き延びているということを伝えようとし、朝日の君は、固い絆の証として結んだ縹の帯を頼りに、別れたあなたを見つけ出すのだという決意を伝えようとした。

問6 傍線部E「御心中おしはかるべし」とあるが、ここで語り手はどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最

も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① 中将との再会の望みを果たせず妻が亡くなった悲しみに加え、死を予感しつつ母にあてて書いた中将の手紙を読まなければならなかった大将の心痛のほどを思いやっしてほしいということ。
- ② 中将の行方を探す旅の途中で妻が亡くなった悲しみに加え、来世での母との再会を願って死を決意した中将の手紙を読まなければならなかった大将の心痛のほどを思いやっしてほしいということ。
- ③ 中将の行方を探す旅の途中で妻が亡くなった悲しみに加え、今後は俗世との縁を一切絶つと告げる中将の手紙を読まなければならなかった大将の心痛のほどを思いやっしてほしいということ。
- ④ 中将との再会の望みを果たせず妻が亡くなった悲しみに加え、山中で病に倒れたときに母の夢を見たという中将の手紙を読まなければならなかった大将の心痛のほどを思いやっしてほしいということ。
- ⑤ 中将の行方を探す旅の途中で妻が亡くなった悲しみに加え、馬の鞍に結び付けられた中将の危篤を告げる手紙を読まなければならなかった大将の心痛のほどを思いやっしてほしいということ。

第 4 問

次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(設問の都合で送り仮名を省いたところがある。)(配点 50)

鮑叔固已識管仲於微時。仲相齊、叔薦之也。仲既相内

修政事、外連諸侯。桓公每質之鮑叔。鮑叔曰、「公必行夷吾

之言。叔不惟薦仲、又能左右之。如此真知己也。

及仲寢疾、桓公詢以政柄所屬、且問鮑叔之為人。対曰、

「鮑叔君子也。千乘之國、不以其道予之、不受也。雖然、其為

人好善而惡惡已甚、見一惡、終身不忘、不可以為政。仲不

幾負叔乎。不知此正所以護鮑叔之短、而保鮑叔之令名

也。叔之知仲、世知之、孰知仲之知叔之深如是耶。

曹參微時、与蕭何善。及何為宰相、与參隙、且死、推賢

類^ス | 相^ヲ、悉^ク 遵^ニ 何^ノ 約^ニ 束^ニ 無^レ 所^ニ 變^更 此^ノ 二 人 事、与^ニ 管 鮑 相 反、而 実 相

惟^ダ 参^ノ 参^ノ 聞^{キテ} 亦 趣^{ヤカニ} 治^レ 行、吾 且^ニ 入^{リテ} 相^ト 使^{タラ} 者 果^{タシテ} 召^ス 参^ヲ。参 又 属^{セラ} 其^{ルヤ} 後

(張燧『千百年眼』による)

(注)

- 1 鮑叔——春秋時代の齊の重臣。管仲との交友関係は「管鮑の交わり」として知られる。
- 2 管仲——齊の宰相。
- 3 微時——身分の低いとき。
- 4 桓公——齊の君主。
- 5 夷吾——管仲のこと。
- 6 千乘之国——兵車千両を出すことのできる大国。
- 7 曹参——前漢の第二代宰相。
- 8 蕭何——前漢の初代宰相。
- 9 隙——すぎま。仲たがい。
- 10 治^レ行——旅行の支度をする。
- 11 約束——とりきめ。法令。

問 1 波線部(a)「質」・(b)「負」の読み方として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解

答番号は

27

28

(a) 質

27

⑤ ④ ③ ② ①

せむ ただす ちかふ あたふ すすむ

(b) 負

28

⑤ ④ ③ ② ①

にくま たのま おは まけ そむか

問 2 傍線部(ア)「政柄」・(イ)「為人」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選

べ。 答番号は

29

30

(ア) 政柄

29

⑤ ④ ③ ② ①

政策の是非 政治の実権 政権の委譲 政界の利権 政局の行方

(イ) 為人

30

⑤ ④ ③ ② ①

性格 短所 習癖 実績 評判

問3 傍線部A「叔不_レ惟薦_レ仲、又能左右之_レ如此」・B「不_レ以_レ其道予_レ之不_レ受也」の解釈として最も適当なものを、

次の各群の①く⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 31 ・ 32。

A 叔不_レ惟薦_レ仲、又能左右之_レ如此 31

- ① 鮑叔は管仲を宰相に推薦しただけでは心配で、このように自らもまた桓公を通して政治に関与していたのである。
- ② 鮑叔が管仲を宰相に推薦しただけではなく、このように管仲もまた鮑叔のことを気づかうことができたのである。
- ③ 鮑叔は管仲を宰相に推薦しただけでは心配で、このように管仲が道を踏みはずさぬように導いてもいたのである。
- ④ 鮑叔が管仲を宰相に推薦しただけではなく、このように管仲もまた鮑叔と権力をわけあうことができたのである。
- ⑤ 鮑叔は管仲を宰相に推薦しただけではなく、このように見えないところでうまく管仲を補佐してもいたのである。

B 不_レ以_レ其道予_レ之不_レ受也 32

- ① 経緯を明らかにしなくては、与えたものですら受け取らない。
- ② 規範を示さなければ、与えたものを受け取る気を起こさない。
- ③ 大義がなければ、与えたところで受け取るうとはしない。
- ④ 主義に合致していなければ、与えても受け取るすべを知らない。
- ⑤ 方法を知らないままでは、与えたものを受け取るうとはしない。

問 4 傍線部 C「不_レ可_ニ以_レ為_レ政」とあるが、管仲はなぜそう言ったのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 鮑叔は好き嫌いが激しく、度量が小さいから。
- ② 鮑叔は不正を嫌うあまり、融通がきかないから。
- ③ 鮑叔は行動を慎みすぎて、積極性に乏しいから。
- ④ 鮑叔は名誉を求めるのに急で、忍耐力に欠けるから。
- ⑤ 鮑叔は過去にとらわれて、革新的でないから。

問5 傍線部D「叔之知仲世知之、孰知仲之知叔之深如^レ是耶」とあるが、筆者の主張を説明したものとして最も
適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 管仲と鮑叔の友情は世によく知られているけれども、政治に不向きであるという鮑叔の短所を長所に変えるすべを、管仲が桓公に伝えていたことまでは知られていない。
- ② 管仲と鮑叔の友情は世によく知られているけれども、鮑叔が不向きな政治にかかわって彼の功績を傷つけることのないよう、管仲が配慮していたことまでは知られていない。
- ③ 管仲と鮑叔の友情は世によく知られているけれども、千乗の国を治めうるほどの鮑叔の才能を管仲がねたんで、後継者として鮑叔を推薦しなかつたことまでは知られていない。
- ④ 管仲と鮑叔の友情は世によく知られているけれども、管仲が鮑叔の短所を補って、彼の立場が悪くならないようにつねづね配慮していたということまでは知られていない。
- ⑤ 管仲と鮑叔の友情は世によく知られているけれども、管仲が鮑叔の長所を熟知したうえで、宰相の選任という国家の大事に適切に対処したことまでは知られていない。

問 6 傍線部 E「此二人人事、与管鮑相反、而実相類」とはどういうことか。それを具体的に説明したものと最も適當なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。 解答番号は 35。

- ① 曹参が蕭何の死後に対処しようとしたことと、鮑叔が管仲の死後までを考慮していなかったこととは、まるで正反対のようではあるが、ともに友人を心配する気持ちが強かった点では同じであるということ。
- ② 蕭何が曹参に宰相の座を譲ったことと、管仲が宰相の座に執着したこととは、まるで正反対のようではあるが、ともに後継者選びが国家の未来を決定する重大事だと考えた点では同じであるということ。
- ③ 蕭何が後継者に曹参を指名したことと、管仲が鮑叔を宰相に推薦しなかったこととは、まるで正反対のようではあるが、ともに親友に対する深い理解に基づくものだった点では同じであるということ。
- ④ 曹参と蕭何が仲たがいをしていたことと、管仲が鮑叔から常に恩義を受けていたこととは、まるで正反対のようではあるが、ともに相手への深い友情によるものだった点では同じであるということ。
- ⑤ 曹参が蕭何の推薦を得て後継者になれたことと、鮑叔が管仲の後継者になれなかったこととは、まるで正反対のようではあるが、ともに国家の将来にとってよい人事であった点では同じであるということ。